Osaka University Knowledge Archive

Title	近現代ドイツにおける反ユダヤ主義の歴史的位置
Author(s)	竹中, 亨
Citation	大阪大学文学部紀要. 1999, 39, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7105
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

近現代ドイツにおける反ユダヤ主義の歴史的位置

竹中　亨

はじめに

反ユダヤ主義というテーマは，今日の世界においても，なおきわめてアクチュアルである。近年における世界各地での民族間紛争の激化や，さらには「民族浄化」の頻発という背景の前で，ナチズムとホロコーストは，いわば一種の歴史的祖型としての意味をもっている。このテーマで依然として多くの研究者が学問的な取り組みを続けており，そして最近ではある刺激的な研究をめぐって大きな論争が生じたが，それも当然なのである。

しかし他方では，誤解を恐れずに言えば，反ユダヤ主義のアクチュアリティは，それを歴史的に考察しようとする際に，かえって一種の制約になっている面がある。何と言っても，ナチスによるユダヤ人の大量殺戮という圧倒的な事実のもつ重みが，ともすれば冷静な概念的把握よりも，性急な倫理的断罪へと研究者を傾かせるからである。逆に，このテーマを学問的に把握しようと努力するとき，研究者は道徳的自問を繰り返さずにいられない。自分が，その学問的営みによって，暗黙のうちで，あるいは結果的に，ナチスとの共犯関係に陥っているのではないかと警戒するからである。こうしたテーマの事情が，ややもすれば研究者に一種の自己抑制となって作用するのはきわめて自然なことであり，そしてまた，避けられないことでもあろう。

いずれにしても，学問的成果という面から見れば，反ユダヤ主義に関する従来の研究は，やや物足りなさを残している点は否めない。上に述べた事実そのものの重みにとらわれてしまって，ややもすれば近現代における反ユダヤ主義の諸相を通観的に叙述するだけに流れるきらいがある。一方，分析的な切り込みが不十分なために，反ユダヤ主義の原因や役割については，納得できる答えを与られずにいるのである[1)]。

筆者は，帝政ドイツ期の反ユダヤ主義について，著書で原理主義という観点から解釈を試みた[2)]。ただ，そのときには，筆者の中心的な関心だった農民運動や反近代主義との関連が前面に出たために，十分に論を展開する余裕がなかった。そこで，まず筆者の反ユダヤ主義

解釈を，近年の研究業績をも踏まえて改めて整理しておきたい。これが本稿の第一の目的である。次に，第二の目的として，この私見を従来の反ユダヤ主義研究との関連で位置づけてみたい。とくに焦点となるのは，ドイツ近現代史全体における反ユダヤ主義の意義，とりわけホロコーストにいたる連続性いかんの問題である。著書では筆者は，帝政期に対象時期をしぼって立論した。本稿では，この問題について仮説的な展望を試みようと考える。

1

ホロコーストの歴史的淵源を問う場合，いわゆる「反ユダヤ主義」と一括される諸現象において，二つの側面を区別するのが適当である。すなわち，社会心理的現象としての側面と，政治的現象としての側面である。こうした区別は，従来の研究でも似た形でしばしば行われてきたから，さほど目新しいものではないだろう。念のために，ここで区別を立てる理由を述べておこう。

第一に注目したいのは，ユダヤ人に対する差別観念や物理的迫害は，ヨーロッパでは中世以来の長い歴史をもっているという事実である。したがって，20世紀になってなぜナチスのホロコーストが生じたかを説明するには，単に差別や迫害の長い伝統があったと指摘するだけでは不十分である。それは必要条件であっても，いまだ十分条件にはなっていない。ホロコーストを説得的に説明するには，何らかの因子をさらに考えなければならないのである。

第二に，ナチズムとそれに先立つ種々の反ユダヤ的運動は，何より政治的現象であった。彼らはいわゆる「ユダヤ人問題」に政治的な解決を求めて，組織的な活動を展開したのである。社会的偏見は激しく昂進すると，自動的に政治的次元へと高まっていくものだろうか。筆者は，社会的偏見がいかに激しいものであろうと，それと政治的現象との間には，質的な相違が存在すると考える。この点は，従来の研究でもだいたい肯定されていると言える。多くの論者は，ナチズムの先駆と見なしうる政治的な反ユダヤ運動がおおよそ1870年代に初めて登場したこと，しかも，それはほとんど中欧圏に限られるということ，さらに，こうした運動は多くの場合，景況の変化などの社会的背景と連動していることを認めているのである。

筆者は，このうち社会心理的現象を「ユダヤ人憎悪」Judenhaß，政治的現象を「反セム主義」Antisemitismusと名付けて区別しておきたい。したがって，整理するなら，「反ユダヤ主義」という上位概念の下に，「ユダヤ人憎悪」と「反セム主義」という二つの下位の概念があることになる[3)]。

ホロコーストを明らかにするという問題関心からは，反セム主義のほうに力点が置かれることになる。ここで念のために強調しておくが，筆者はユダヤ人憎悪に歴史的意義が乏しい

と主張しているのではない。それどころか，近代のドイツ社会の特質を理解するためにも，この面を明らかにすることはきわめて重要な作業である。たとえば，差別をマージナル・マン（境界人）の社会心理的機制と理解するモデルは，中間層の心性にアプローチする手がかりを提供している。すなわち，近代化の社会変動によって，中間層の観念世界における所属集団と準拠集団の分裂が生じ，そのために差別される自己が今度はユダヤ人を差別するという差別の連鎖構造が生まれたと解釈できるのである[4]。

ただ，本稿の関心は，社会心理的側面ではなく，あくまでも政治的次元にある。換言すれば，ユダヤ人差別そのものではなく，差別に付随する政治的な機能や意味を問題にしたいのである。

また，同じ理由から，攻撃される側のユダヤ人の状況がどうであったかという視角も，相対的に本稿の問題関心の圏外にとどまる。以下で詳しく論じるように，反セム主義のもっていたさまざまの反ユダヤ的観念は，現実のユダヤ人と必ずしも関連していなかった。換言すれば，反ユダヤ主義の原因はユダヤ人自身に存するのではない。つまり，ユダヤ人の状況を明らかにしたからといって，反ユダヤ主義が解明されるわけではないのである[5]。まさしくサルトルが述べたごとく，「もし，ユダヤ人が存在しなければ，反ユダヤ主義は，ユダヤ人を作り出さずにはおかないだろう」と考えられるのである。実際，後段で述べるように，反セム主義者が照準をあわせていたのは，必ずしも現実のユダヤ人ではなかった[6]。

なお，念のために一言付け加えておきたい。それは，ユダヤ人憎悪と反セム主義という区別はあくまで分析的次元のものであり，現実には両者は混交することがしばしばあったということである。伝統的な偏見という土壌を抜きにして，およそ反セム主義が生じることはありえなかった。このイデオロギーは，素材の面からすれば，旧来の通念的ユダヤ観に大きく依っていたからである。逆にまた，反セム主義という，ある程度合理化された観念の体系が，偏見を心理的に正当化し，そしてその表出を助長・促進する作用をおよぼしたということは容易に想像されるのである。

2

反セム主義を掲げた政治勢力は，ユダヤ人に対する非難と攻撃を繰り返した。「ユダヤ人問題」こそが諸悪の根元であり，それを政治的に解決せねばならないというのが，彼らの倦むことなく唱えたところであった。では，彼らの言う政治的解決とは，いったいどのようなものであったのか。反セム主義を標榜する勢力には多種多様な主張があったが，それを敢えて集約すれば，ユダヤ人の政治的・市民的同権の撤廃ということになろう。つまり，19世紀中葉に実現したユダヤ人解放立法を廃止して，彼らを再び二級市民として貶めることであっ

た[7]。

ただし，もっぱらこうした理解からのみ帝政期の反セム主義を把握するとなると，そのプロパガンダの実態をあまりに表面的に捉える誤りを犯すことになる。彼らの演説はそれ以外に実際にはもっと個別の事態，問題にも向けられていたし，その眼目はそうした問題に現れたユダヤ人の「悪辣さ」や「陰謀」を明らかにすることにあった。つまり，ユダヤ人をひたすら言論の暴力で叩くことそれ自体が，彼らの流儀であった。したがって，しばしばこじつけや事実無根の邪推による「暴露」が横行した。当時の反セム主義者の中には名誉毀損で訴えられた者が少なくない。それは，たしかに一面では，反セム主義に反対する側のユダヤ人たちがしばしば法的手段に訴えたという事情によるところが大きい。しかし同時に，上記のような反ユダヤ・プロパガンダの性格すれば，別段不思議なことではなかった。

仮に，反セム主義者が主観的には「真面目に」ユダヤ人の奪権を論じたとしても，聴衆の方は，必ずしもそうは受け取らなかった。むしろ，彼らもそうした「暴露」につきもののスキャンダリズムに好んで耳を傾け，そして溜飲を下げる思いを楽しんだのである。とすれば，常識的・理性的な論議よりも，荒唐無稽で派手な筋書きの内幕話のほうが聴衆にはずっと受けただろう。そこには，日常生活からの気晴らし，娯楽の要素があったことは否定できない。とくに，ユダヤ人イメージなどの点で，反セム主義プロパガンダと当時のキャバレーなどの大衆向け笑劇などとの間には，相通じるものが認められるのである。このように，反セム主義の唱える反ユダヤ的コードは，その内容を文字通り受け取るわけにはいかない。すなわち，「何が語られたか」よりも，ここではむしろ「どう語られたか」が重要なのである。

さらに，内容面に踏み込んだ場合にも，反セム主義の反ユダヤ的修辞を文字通り受け取るのは問題がある。反セム主義者の中には，いわば支持者へのアピール上の一種の便宜から，反ユダヤ的修辞を用いた者が少なくなかった。また，支持大衆の側でも，ユダヤ人への攻撃のゆえに，反セム主義的政党に支持を寄せたのかどうかははなはだ疑問なのである。たとえば，反ユダヤ的な色彩の濃い農民運動などを子細に検討してみると，個々の社会集団・階層の社会的・経済的主張の表出を，反セム主義イデオロギーという外被に包んだと捉えるほうが，むしろ適当なのである。

こういう場合には，「ユダヤ」という語はきわめて多義的となる。それぞれの個人や集団が，それぞれ相異なる非難や反発を，すべてこの語の中に持ち込むからである。そうすると，「ユダヤ」の語が次第に現実のユダヤ人，ユダヤ教との実体的な関連を失っていく。言い換えれば，「ユダヤ」は固有名詞たることをやめ，悪一般の形容詞に化していくのである。加えて，「ユダヤすなわち悪なり」と言い募れば募るほど，論理の逆転も容易になる。「悪すなわちユダヤなり」という命題も等しく力を増してくるからである。こうしてついに

は，およそ非難，攻撃，唾棄の対象は，すべてこの語を冠せられることになる。ヒムラーが述べたごとく，「ユダヤ人は，あらゆる否定的なものの根源Urstoff alles Negativesである」ことになる[8]。こうしたメカニズムを，ここではユダヤ概念の「唯名化」と呼んでおきたい。

つまり，反セム主義は，実体としてのユダヤ人を前景に置きながらも，その後景にあるとされる「ユダヤ的なるもの」にこそ，本来の攻撃の照準をあわせようとしていたのである。その場合，両者の間の距離は，しばしば現代のわれわれが想像する以上のものになることがある。たとえば，ナチ期のことになるが，ある農民に言わせれば，近隣に住んでいて，自分とも日常交際のある「まともなユダヤ人」を連行するなど到底許せない話だが，「大金持ちで，アメリカに住んでいて，戦争に火をつけた」ユダヤ人なら強制収容所送りも当然なのであった[9]。このように，同じユダヤ人でも，天地ほどの差がつけられるのである。

この例の後者では，ユダヤ人は日常の現実から抽象化された存在になっている。このユダヤ人像は，悪の諸属性を単に人格的な形で表現したものにすぎない。それだけに，そこにはあらゆることをそれに読み込むことができるし，またそれはどんな解釈をも許す伸縮自在の概念である。現実との対応関係が希薄になればなるほど，それは一種の記号としての性格を強めていく。

唯名化という思考メカニズムそれ自体は，別段の知的営為を要するものではない。たしかに，一部の反ユダヤ的知識人がこれに高踏的な表現を与えることはあったとしても，それは基本的にはごく自然な思考の筋道だった。「ユダヤ」という語彙でもって語ろうとする者なら，だれでも無自覚のうちに，このような形で観念を展開させることはありえたのである。

しかし，まさしく無自覚的な思考過程だったがために，そこにはつねに一種の揺れが伴ったことは，注意しておかねばならない。つまり，「ユダヤ」記号は人びとの脳裏でつねに明瞭に記号として認識されていたわけではないということである。とくに，この記号が実体的な由来をもつがために，記号それ自体（記号表現）と，それによって表されるもの（記号内容）との混同は，しばしば容易におこりえた。いったん現実のユダヤ人から抽象されたはずの「ユダヤ的なるもの」が，何かの契機に，再び現実のユダヤ人へと帰せられるというメカニズムである。

ユダヤ人に対する暴行や迫害が現実に生じたとき，このことはしばしば決定的な重みをもった。記号内容と記号表現の混同というメカニズムが，反ユダヤ的な直接行動を黙認，あるいは助長するのに一役かったことは，想像にかたくないからである。一例として，ワイマール初期に右翼勢力の反ユダヤ的策動が跋扈したときに，ドイツ社会が異様なほどこれに寛容であったことを想起したい。さらにまた，ゴールドヘーゲンの著作をめぐる論争[10]で焦点となった点，つまり「普通のドイツ人」がホロコースト遂行に積極的に加担したかどうか

をを考える際にも，この混同のメカニズムを考慮に入れてよいのではなかろうか。

3

反セム主義は，唯名化されたユダヤ観念でもって大衆の社会的憤懣に訴えかけた。上で述べたように，それは唯名化された反ユダヤ的修辞の下に，特定の社会政策的，経済政策的主張を含んでいた。とすれば，反セム主義が国民一般というより，特定の社会集団に焦点をあてていたのは当然である。実際，反セム主義勢力の支持層には，一定の社会的な偏りがあった。それらが中間層や農民を支持基盤としていたことは，今日多くの見解の一致するところである。換言すれば，反セム主義は中間階層の政治勢力であった。

反セム主義と中間階層の結びつきは，決して偶然ではない。両者を媒介するのは，反近代という要素である。中間階層は，19世紀後半ドイツの近代化の過程で強い不安に脅かされていた。もちろん，純経済的に見た場合，彼らが等しく没落の縁に立っていたとは言えない。工業化の時流に適応したり，あるいはそれに乗って繁栄さえした業種もあったからである。

しかし，急速で激しい社会変動は，社会心理面で人びとに大きな動揺を与えた。自分たちを取り巻く生活世界は自明さを失って転倒し，社会のありようについての了解や，その中における自らの位置づけを混乱させた。これは，人びとの心の中に不透明感と不安を呼び起こすに十分であった。彼らは，自分たちを取り巻く環境を敵意に満ちたものと感じるようになった。自分たちの利益が一方的かつ不当に侵害されていると感じ，近代の社会的現実は自分たちの存立を脅かしていると捉えたのである。

19世紀後半におけるドイツ政治の構造変化，とくに政治の経済化と大衆化の傾向は，中間階層の反発を政治的次元に引き上げた。しかし，既成の政治勢力の中には，彼らの意思を政治的に代弁してくれる勢力はなかった。よく指摘されるように，近代ドイツの政治社会は，階級と宗派という二重の次元での分界線によって引き裂かれていた。その結果，保守・自由・カトリック・社会という四つの下位世界Milieuが並立していた。だが，そのいずれも——とりわけ，プロテスタントの——中間階層にとっては安住の場ではなかったのである。

政治社会面での帰属先をもたない彼らの政治的意思は，資本と労働という近代社会の二大勢力の間で窒息させられるかのように見えた。反セム主義勢力が現れたとき，中間階層の鬱積した政治的意思がそこへ流れ込んだのは不思議ではなかった。

もっとも，反セム主義というイデオロギーそれ自体は，中間階層自らが生み出したものだとは言いがたい。上にみたように，反セム主義は旧来のユダヤ人憎悪を一定程度合理化し，社会観として体系化したうえに成立する。なるほど，中間階層は旧来のユダヤ人憎悪には強くとらわれていたにしても，しかしこのイデオロギー化作業は彼らの手に余るものだった。

歴史的な起源という面からすれば，反セム主義は「陰謀論」の流れを汲むものだと言える。ここで「陰謀論」というのは，フランス革命以降，主としてカトリックの側から全欧的に唱えられた教説のことで，革命運動や啓蒙主義思潮を「王座と祭壇」の計画的転覆を企図する陰謀だとして論難したのである。陰謀の黒幕として槍玉に挙げられたのは，初期には啓蒙主義者であった。しかし，時代とともに次第にフリーメーソンやユダヤ人へと移り変わっていったのである[11]。

こうした伝統を背景にしつつ，帝政期の社会的現実に合わせて，「ユダヤ人の陰謀」を反セム主義の大衆的基盤となる中間階層に語ったのは，たいていの場合，知識人，とりわけ帝政期に多く輩出された周縁的「教養市民」Bildungsbürgerであった[12]。彼らは，観念論哲学やナショナリズム思想などを反セム主義的信条にあわせて咀嚼し，俗流化して広めた。反セム主義は，こうして一般の人々にも理解可能な言葉で語られ，しかし同時に知的外観の権威を幾分なりとも備えることになった。彼らは，反セム主義が政治運動化した場合には，往々にしてその指導者でもあった。

反セム主義は，中間階層など「近代化の敗者」に一個の社会像を提供した。それは，伝統的な反ユダヤ偏見を基礎にし，しかも歪んだ論理によってではあるが，とにかくも近代社会の仕組みをそれなりに合理的に説明したのである。それまで生活世界の転倒に混乱していた人びとは，これによって自己の社会的定位を再び確認することが可能になったのである。

反セム主義の社会像は，「ユダヤ的なるもの」を標的に掲げることで，人びとの感じる脅威がどこに由来し，したがって何に向けて抗議の声をあげるべきかを教えた。しかし，それ以上に大事なことは，反セム主義がこの抗議を倫理的に正当化したことである。「ユダヤ的なるもの」が至高の国民的大義を根本的に否定する悪だということになれば，これを攻撃することは道徳的行為である。それは，正義に奉仕する無私の行動なのであり，公共的な義務でさえあろう。こうして，財の分配をめぐって社会の各層が相争う帝政期の政治社会に参入するにあたって，人びとは特殊利益の擁護につきまとう後ろめたさを免れたのである。

このように，反セム主義は，結果的に反近代的抗議の政治的表出を促すことになった。換言すれば，反セム主義は中間階層の政治化を合理化し，促進するイデオロギー的触媒の機能があったと言えよう。

反セム主義には，原理主義イデオロギーの性格が見て取れる。というのは，一個の絶対的価値を過去の歴史に仮定し，それを原理的な足場にして現実の社会を指弾するという思考パターンに沿っているからである。もちろん，反セム主義者が夢想する理想郷，つまり「ユダヤ的なるもの」を拭い去った，国民的に純化された社会が，具体的にどのような社会なのか，あるいはまた，そうした社会がおよそ歴史上存在したことがあったのかということは，そこでは問われない。彼らにとって問題なのは，近代世界の社会的現実がこの絶対的価値か

らいかばかり乖離しているか，という点なのである。彼らは，反ユダヤ偏見という土俗的観念に反近代という思想的方向性を与え，それに基づいて，直面する社会的現実の全面的な否定を唱えたのである。

そして，原理主義一般にしばしば認められるように，反セム主義は政治的に両義的な面をもっていた。従来の通説では，帝政期の反ユダヤ主義は，帝政の権威主義的体制に内在する緊張を和らげる「安全弁」たるべく，支配エリートによって操作されたものだとされる。しかし，上に見たように，近代の社会的現実への人びとの反発は，必ずしも体制に無害な方向に誘導されたとばかりは言えない。伸縮自在の反ユダヤ的コードは，場合によっては，現秩序に対する攻撃的契機を含むことが十分ありえたのである[13]。

原理主義という視角をとるとき，反セム主義，およびそれが孕む反近代的要素が「後ろ向き」の方向性のみを備えたわけではないことが見えてくる。反近代を単純に過去志向と等置するのは，モダニズム的固定観念にほかならない。復古と改革の相反する要素が一つの思想や運動に同居するという，現代史に往々にして現れる現象は，歴史に長く伏流していたのである。

4

以上述べたことから明らかなように，筆者の反ユダヤ主義把握は，方法的に外在的である。つまり，反セム主義が思想や観念としてどのような内容的特徴をもっているかに焦点をあてるのではなく，むしろ記号として発信者と受信者の間で流通している面を重視する。反セム主義がなぜ一定の社会的勢力になりえたかを考える際にも，その内在的論理の次元にではなく，あくまでも反近代主義イデオロギーとしての機能面に鍵を見出そうとするからである。

このような把握に対しては，思想としての内実を大幅に捨象することへの抵抗感から，批判が少なくなかろう。もっとも，これまでの反ユダヤ主義研究を顧みれば，内在的方法が方法として必ずしも大勢だったわけでないのは明らかである。それどころか，たとえば反ユダヤ主義の定番的理解とも言えるスケープゴート論も，方法的観点からすれば外在的方法の部類に属する。近代ドイツの反ユダヤ主義についても，機能的理解を唱える論者としては，ヴォルコフやリュールップらが挙げられる。前者は，反ユダヤ主義を文化コードと把握して，帝政期の政治文化状況の中でのその役割に注目する。後者は，単一の「ユダヤ人問題」が近代ドイツの全社会構造の変転を背景にして，時期によってユダヤ人解放と反ユダヤ主義という対極的な現象形態をとったのだと考える。また，ナチス期に関しては，モムゼンの所論も機能的理解に含まれよう[14]。

筆者の方法的根拠は，すでに前段でも述べたように，反ユダヤ観念が果たして思想として扱いうるほどの体系性や論理的整合性を備えたものだったかという疑念にある。この点をどう考えるかは，筆者の考えでは，反ユダヤ主義を扱う方法的視座を定めるうえで決定的な重みがある。たしかに，思想としての質を試すのは，容易ではない。しかし，内在的方法をとる論者は，この点をあまりに軽視しているように思われる。ニーウィクの研究は，その典型である[15]。彼は，文化コード論は反ユダヤ主義思想の中味に立ち入らないからというだけ理由で，これを否定する。しかし，文化コード論が思想の内在的検討を行わないのは，その方法的特質からして当然であり，ニーウィクの批判は，実は批判になっていない。

ちなみに，ニーウィクによる反ユダヤ主義の内容的検討は，特徴的である。彼の研究では，帝政期の反ユダヤ主義者を，「ユダヤ人問題」にどのような解決策を構想していたかを基準に分類することが目的になっている。つまり，解放立法の撤廃と二級市民としてのユダヤ人の隔離で十分な解決になると考えていたか，それとも後のナチスと同様，ユダヤ人の国外追放を必要視していたか，という点である。そして彼は，帝政期の反ユダヤ主義者の大多数は前者の隔離論者であったと論じ，そこにナチスとの質的差異を主張するのである。

しかし，この研究に方法的に賛同しがたい点を感じるのは，筆者だけではあるまい。ここで穏健な方途とされる解放立法の撤廃でさえも，ユダヤ人の同化がすでに確たる社会的現実になっていた帝政ドイツでは，およそ実現可能性が皆無の，いわば浮世離れした話であった。つまり，隔離にせよ，追放にせよ，ともに現実には純然たる夢想でしかなかったのである。両者の間の精妙な差異を論じ分けるのに，反ユダヤ主義者たちがそれほどまでに神経を使ったどうかは怪しい。そして，たとえ彼らが狂信に駆られて，そうした議論のための議論に耽っていたのだとしても，歴史的分析を行う後代のわれわれが，この差異にそこまでの意義を認めるのは問題である。

外在的方法も，もちろん難点を完全に免れているわけではない。とりわけて問題なのは，反セム主義の歴史的意義が反近代主義というイデオロギー的機能にあったのだとしても，その抗議エネルギーの目標は，なぜユダヤ人という特定の対象でなければならなかったのかという点である。この点をめぐる問題を，内在的方法をとるカッツは「契機」と「理由」という言葉を使って整理している[16]。彼によれば，たとえばスケープゴート論では，社会的緊張という反ユダヤ主義の「契機」は説明できても，それがよりによってユダヤ人に向けられる「理由」を解明せずに放置したままだというのである。こうした方法的反省から，彼は「理由」解明の企てとして，近代以降の種々の反ユダヤ思想の内容を逐次的に紹介することに全力を挙げるのである[17]。

たしかに，外在的方法では，「理由」の説得的な説明は難しい。したがって，筆者も内在的方法がまったく無益だなどと言うつもりはない。ただ，カッツのように，反ユダヤ主義の

説明においては，「契機」と「理由」の双方が必ず相伴わねばならないとするのは，やや一面的である。反ユダヤ観念という，連綿として歴史を貫いて存在する精神的土壌を所与として仮定すれば，「契機」を説明するだけで，一応は反ユダヤ主義の説明となるからである。逆にカッツのように，反ユダヤ観念が歴史遍在的だとひたすら強調するだけでは，かえって，なぜ特定の時期と場所で反ユダヤ主義が燃えさかったのが説明できなくなる。

もともと，外在的方法と内在的方法は，根本から背反するもので，両者を総合する視点など存在しない。それぞれの方法が独自にもたらした研究の果実が，相補う形で研究全体に寄与するのが望ましいことは言うまでもない。

5

ホロコーストの歴史的淵源を考える際に，帝政期以降，ナチス期にいたる反セム主義を連続的と捉えるかどうかは，中心的なテーマである。言うまでもなく，それはドイツ近現代史全体についての連続性をめぐる論議とも重なってくる。

総体的に言えば，従来の研究では，反ユダヤ主義についても連続説の主張が圧倒的大勢を占めているとしてよい。つまり，ナチスの狂信的な反ユダヤ主義は，直接には帝政期に起源をもつものだと考える見解が支配的である。この見解にしたがえば，帝政期の反ユダヤ主義なしには，ホロコーストは生じることはなかったということになる。

しかし，筆者は，こうした連続論は大きな問題を孕んでいると考える。まず，事実との実証的な符合を云々する以前に，連続論には論理上の難点がある。というのは，根本的には，これは問題の解答をただ先行する時代に先送りしているだけだと言えるからである。ホロコーストを可能にしたナチスの反ユダヤ主義の特異性が問われるとき，それが帝政期を起源とするものだったと答えるだけでは説明にならない。というのも，では帝政期の反ユダヤ主義がなぜそのように特異だったかという次の問いが，すぐさま浮上してくるからである。

このことは，連続論の極端な例として，ゴールドヘーゲンの説を考えてみればよく分かる。彼は，ナチスの「排除的反ユダヤ主義」eliminationist antisemitismは「ドイツの文化と社会の風土病」だったと断ずる[18]。たしかに彼は，この型の反ユダヤ主義が19世紀初頭に成立したと述べ，その背景として当時のユダヤ人解放の進行を指摘している。しかし，その一方では，彼は中世以来の連続性を依然として強く暗示するうえ，なぜユダヤ人解放が単なる反ユダヤ的偏見の量的な増幅にとどまらず，新たな型の反ユダヤ主義を生むという質的変化をもたらしたのかについては，全然説明していない。

したがって，ホロコーストの歴史的説明としては，ゴールドヘーゲンの見解はきわめて内容に乏しい。ドイツにおける反ユダヤ主義の伝統の長さ，根深さを強調することで，その特

異な残酷さがいつ，どのように生じたかという説明を置き換えている感がある。敢えて言えば，彼の見解は，むしろドイツの民族的特性に焦点をあわせた非歴史的説明に傾いている[19]。

もっとも，近年の連続説には過去を無限に遡っていく極論は少なく，通例は帝政期以降の連続を主張する。その場合，1870年代に反ユダヤ主義が根本的な変質を経たことが強調されるのが常である。その結果，「近代的反ユダヤ主義」なるものが生まれたのだとされるのである。この立場からすれば，帝政期の反ユダヤ主義は，それ以前のものとは本質的に異なるものであり，他方ナチズムとは同質の過激さを備えるものと理解されるのである。そして，こうした理解の場合には，先送りという上述の論理的な難点は避けられる。

たとえば，ベアディングの見解はその代表例である[20]。彼は，19世紀の反ユダヤ主義史を二段階に把握し，まず前半に旧来の反ユダヤ偏見が昂進して初期反ユダヤ主義が生まれ，さらにこれを母体にして，帝政期に近代的反ユダヤ主義が成立したと考える。ただ，初期反ユダヤ主義と近代的反ユダヤ主義とのつながりは相対的なものであり，むしろ帝政期以降，ナチズムに向かってドイツの反ユダヤ主義には太い連続線が走っていると捉えるのである。

彼が帝政期の反ユダヤ主義にこうした大きい転機を見る理由は，二つある。第一に，この時期に初めてに反ユダヤ主義は政党の形姿をとって政治運動化した点である。もう一つは，人種論が反ユダヤ主義と結びついた点である。こうして人的・組織的・社会的，イデオロギー的次元において，帝政期反ユダヤ主義は，事実上ナチズムと本質的な同一な性格を帯びるにいたったという。

しかし，この「近代的反ユダヤ主義」の見解については，数少ない非連続論者のヴォルコフが説得力のある反論を行っている[21]。帝政期の反ユダヤ主義を際立たせる特徴とされる二つの点は，いずれも根拠に乏しいというのである。というのは，反ユダヤ主義の政治的な活動は，すでに三月革命期において確認されるのであり，帝政期をもって嚆矢とするわけにはいかない。さらに，人種主義思想についても，これが帝政期の反ユダヤ主義者の核心的な思想になったとするのは過大評価だと言う。

この二つのうち，前者の点については，筆者自身は，反セム主義という政治的言語の成立という観点から，1870年代にやはり一つの節目を認めるべきではないかと考える。しかし，後者については，ヴォルコフと同様，人種主義の過大評価を戒めたい。人種主義との関連は，ホロコーストとの連続性を唱える際に，もっとも引き合いに出される論点である。しかし，実際には反セム主義者は，自己の反ユダヤ的主張を言い募ろうとすると，ほとんどの場合，何らかの人種論的論法を肯定するようになる。帝政期の反セム主義者のうちで非人種論的な立場をとった者は，むしろ少数であった。現に，ホロコーストの源流の遡及に熱心なゴールドヘーゲンによれば，すでに19世紀前半に人種観念を含んだ反ユダヤ論が見出されるという[22]。さらに，反セム主義の思想としての体系性，論理性の欠如を考える必要がある。

上で述べたように，「何が語られたか」より「いかに語られたか」が重要だとすれば，思想の内容に過度の意義を認めるのは問題である。

連続性の論拠としてよく挙げられるもう一つは，社会的拡散という事態である。帝政後半期には，さまざまの組織や団体が公然と反ユダヤ的な主張を掲げるようになった。手工業団体や学生組織などがその典型である。こうして，政党が標榜するいわばハードな反ユダヤ主義に代わって，非政治領域へソフトな形で，反ユダヤ偏見はむしろ社会全体に拡散したというのである。ヴィンクラーは，ワイマール期にも，文化的次元で「退廃的なユダヤ人」という否定的な像が引き続き大きな影響を与えたと見ている[23]。

連続論の立場からすれば，ソフトな反ユダヤ主義は，その浸透力のゆえにいっそう危険であった。反ユダヤ主義は，そうしていつの間にかドイツ社会で社会的認知を得ていったからである。それがワイマール期初期に，市民層上層への反ユダヤ的心情の拡大につながり，ついには暴力的な右翼運動の土壌を作ったというわけである。

たしかに，帝政後半期にこうした意味での社会的拡散が生じたことは，これまでも再三指摘が重ねられてきており，歴史的事実としては疑問の余地はない。しかし，だからといってこの論法では，反セム主義の連続性を立証することにはなるまい。なぜなら，これは本稿冒頭で述べたユダヤ人憎悪と反セム主義の間の相対的区別を再び曖昧にしてしまうからである。本稿の立論の前提に立つかぎり，ユダヤ人憎悪が帝政末期にいかに募ったとしても，それだけでは政治的動向を説明することにはなりえないのである。

逆に，帝政末期における反セム主義の全般的衰退という事実が，やはり無視できない重みをもっている。つまり反セム主義諸政党は，1890年代初頭に勢力の頂点に達した後，世紀交替期以降は急速に力を失っていくという事実である[24]。

以上の理由から，ドイツ近現代史における反セム主義については，筆者は基本的には非連続的に捉えるのが適当だと考える。1916年のいわゆる「ユダヤ人統計」Judenstatistikをめぐって生じたような反ユダヤ偏見の再燃は，やはり戦時体制という緊張状況を抜きにしては語れまい[25]。

また，ワイマール期初期の反セム主義団体の簇生は，帝政期の場合とは違って，景況的要因では十分に説明できない。不況とは正反対の，極度のインフレという状況が背景だったからである。たしかに，経済混乱は人びとの生活に大きな影を投げかけたが，それ以上に敗戦，革命，内戦という社会全体を覆う混乱状況が決定的な役割を果たしたのである[26]。あるいは，フリッチェが指摘するように，1914年の大戦勃発以降，ワイマール全期を通して，ドイツの政治が決定的に大衆政治化したという事実を同時に思い合わせるべきでもあろう[27]。さらに，ホロコーストについては，戦争遂行という至上命題とナチス支配機構に内在する特質が決定的な要因となっていた。

このように，1914年以降については，帝政期の諸運動とは相対的に異なった成立事情を考え，異なった展開の論理を想定すべきである。

6

では，帝政期とそれ以降の時期とは，まったく関係が切れているのだろうか。言うまでもないことながら，非連続論を唱える論者も，全面的な断絶を主張するものではない。たかだか五十年ほどの近現代史の時間幅の中で，何らの人的，観念上のつながりも存在しないとするのは，当然ながら暴論である。

たとえばレヴィは，たしかに帝政期の反セム主義政党が大戦前にいったん消滅し，そこに大きな断絶を見る。しかしその一方で，ワイマール期の過激な急進民族主義的右翼の源流は，すでに帝政期においていわば副潮流として存在していたと捉えるのである。またヴォルコフは，反ユダヤ主義とナショナリズムの間に存する共通の思想土壌が，ホロコーストの背景になったことを強調している[28]。

ここでは，それと並んでもう一つの連続性の要素を指摘しておきたい。それは，反セム主義の唯名化されたユダヤ観念と，ホロコーストの背景にある「理性的反ユダヤ主義」（栗原優）[29]との間の親和性である。

一見したところでは，唯名化されたユダヤ観念のもつ醒めた感覚は，ユダヤ人迫害と縁遠いように見える。逆に，ユダヤ人憎悪に伴う感情的激発こそ，直接的な物理的暴力の原動力を用意したかのように思われる。しかし，実際にホロコーストを可能にしたのは，むしろ前者であった。

多くの研究者は，ホロコーストの遂行において，反ユダヤ主義イデオロギーが果たした役割は必ずしも決定的なものではなかったという認識で一致している[30]。なかでも栗原は，とくにゴールドヘーゲン的な「排除的反ユダヤ主義」の意味を過大評価することを強く戒めている。彼によれば，ナチス体制においては，党末端においては，たしかにユダヤ人への暴行やボイコットなどの直接行動への傾向が存し，それが党指導部や政府に圧力となった面があった。他方，こうした下からのエネルギーを利用して，ヒトラーら上層部は自己の方針に沿って，反ユダヤ立法を実現させていった。このように，「民族意思と国家指導部の相互作用」[31]が，ナチスの反ユダヤ政策を全体として作り上げていった。

したがって，反ユダヤ主義イデオロギーがホロコースト実現に一定の役割を果たしたとしても，それはいわゆる「理性的反ユダヤ主義」の側面によるところが大きかった。つまり，むき出しのポグロム的憎悪とは異なって，一連の対ユダヤ人措置に見られるような，一定程度合理化され，抽象化された政策観念である。

本稿で言う唯名化のメカニズムと「理性的反ユダヤ主義」の関連は，容易に見て取れるだろう。唯名化され，反セム主義という観念体系の中に組み込まれたユダヤ観念は，そのことによって自己増殖し，急進化していく条件を得た。「ユダヤ的なるもの」の排撃という理念がいったん掲げられ，そして一種の公理のようになると，この理念への献身を競うようにして，反セム主義者の中で思想は急進化していく。そして，それがナチスドイツで体制化したとき，「理性的反ユダヤ主義」となって，行政的殺戮としてのホロコーストを実現したのである[32]。その意味では，ホロコーストは，上記の唯名化のメカニズムの一つの帰結であった。

以上の主張が正しければ，近代の社会的現実を解釈するための「語彙」としての反セム主義が，近現代のドイツ社会に根づいていたと考えてよいだろう。この意味で，反ユダヤ主義はドイツ史において連続的側面を備えていたと言える。もちろん，そのことは，ゴールドヘーゲンの言うように，一般のドイツ人が心底から反ユダヤ的な迫害や差別を強く望んでいたことを意味するものではない。ドイツ人の多くは，「ユダヤ的なるもの」を口では非難しながら，現実のユダヤ人とは交際していたのである。

とにかく，ナチズムの反ユダヤ主義の教義に対して，多くのドイツ人はさほどの心理的抵抗を覚えなかった。たしかに積極的に信奉した者も多くはなかった。しかし，大勢は，現実のユダヤ人迫害にも消極的ではあれ，容認する傾向を示したし，そうでないとしても無関心な態度にとどまった[33]。自分の生活世界の中で具体的な形をとって生じたのでなければ，眼前で生じても，ユダヤ人の運命は彼らには遠い現実にとどまったのである。それも，長年にわたって反ユダヤ的シンボルに慣れていたためだろう[34]。

ゴールドヘーゲンの所説への批判のなかで，連続性がなぜ1945年を境に突然途切れるのかという批判がある。つまり，反ユダヤ的観念が彼の言うように，いわばドイツ人の血肉と化していたとするのなら，大戦後，どうしてそれが一挙に消滅したのかという問題である。しかし，本稿のように語彙として反ユダヤ観念を捉えるなら，この問題も，ある程度説明が可能になる。敗戦と政治体制の崩壊とともに，価値の根本的な転倒のなかでナチズムが絶対的なタブーになったために，ドイツ人はこの語彙を捨て，社会的現実の解釈に新たな語彙を用いるようになったのである。

おわりに

反ユダヤ主義は，とくにドイツ史の脈絡では，ホロコーストの前史という問題関心から論じられるのが通例である。現に本稿でも，そうした枠組を前提にして考察を行ってきた。しかし，反ユダヤ主義は，歴史の時間軸に沿ってのみ把握されるべきものではない。それは，

たしかに現代的問題に直結するだけに，アクチュアルではある。しかしその反面，幅広い歴史の流れのなかで反ユダヤ主義を位置づけようとする関心から見れば，いささか一面的である。

本稿で提起した解釈は，事実による肉付けを欠いた，文字通り荒削りの仮説の域にとどまっている。しかし，今後の展望としては，近現代の社会変動への政治的反動という共時的観点を可能にするものではないかと筆者は考えている。

従来，近現代の政治史においては，市民革命や労働運動など，近代化に随伴し，それを促進する政治変動に主として研究の焦点があてられてきた。一方，近代化に対抗する流れは，歴史の主流に属さないものとして軽視されてきたきらいがある。さすがに今日では，近代化を規範的に捉えようとする傾向はもう以前ほどは強くはない。しかしながら，近代化に対抗する流れに独自の意義を認めようという考えは，未だに十分な認知を得ていないようである。

反ユダヤ主義の研究が，こうした方向に展開するなら，それは近現代史全般と重なり合う幅の広さをもつことができよう[35]。

注

本稿は，第20回ドイツ現代史学会（横浜市立大学アーバンカレッジ，1997年7月24日～25日）のシンポジウム「反ユダヤ主義の過去と現在 ― 世界的視野で ― 」において「19世紀のドイツ・反ユダヤ主義の展開」と題して行った報告に，当日の議論を参考にして，若干加筆したものである。

1）こうした傾向は，たとえば標準的なドイツ反ユダヤ主義史の概説［Berding, 1988］にも見て取れる。

2）竹中, 1996: 第5章。

3）「反セム主義」という概念名称の適否については，異論もある。この語は，現代の中東情勢との関連からすれば，たしかに誤解を招きやすいからである。しかし，筆者はこの用語法でさしあたり大きな問題はないと考えている。というのは，筆者の立論はドイツ史，あるいはヨーロッパ史という枠組を前提にしているからである。もちろん，この枠組の設定は狭きに失するという批判もあるかもしれない。しかし，筆者は世界的に存在する反ユダヤ主義もしくは反セム主義と呼ばれる多種多様の現象は，名称が同一だというだけで，その内実から見ると，きわめて雑多なものであり，とうてい内容的に一個の概念に集約できるようなものではないと考えている。したがって，たとえば中東からヨーロッパにいたる諸現象を一挙にカバーしうるような概念名称を案出する苦心をはらうことは，実際的にはあまり必要があるまい。

4）小坂井, 1996.

5）もっとも，ユダヤ人の側からすれば，その歴史が反ユダヤ主義ぬきには描かれえないことは，ドイツにおけるユダヤ人の歴史の標準的な概説［Volkov, 1994; Zimmermann, 1997］にも見るとおり，当然のことである。その他，近代ドイツにおけるユダヤ人については，モッセ, 1996参照。

6）サルトル，1956: 9. 戦後西ドイツでは，ユダヤ人人口は著しく少なくなっているが，それでも外国人問題を触媒にして反ユダヤ的動向が生じている［徳永, 1997: 318ff.］。

7）19世紀におけるドイツのユダヤ人問題の概観として，植村, 1993: 序章。

8）Browning, 1996: 8より再引用。

9）山本, 1995: 208. ナチ期の民衆の日常生活においてユダヤ人像が，「身近なユダヤ人」と「抽象的なユダヤ人」として乖離していたことを，山本は別の個所でも指摘をしている［山本, 1995: 239］。

10）この論争については，佐藤, 1997; スターン, 1997参照。

11）Bieberstein, 1992.

12）中間階層の反セム主義への知識人の影響について，Jochmann, 1988a: 19. さらに，帝政期における周縁的「教養市民」と反近代主義の関連については，竹中, 1996: 第6章。

13）原理主義については，竹中, 1996: 170f.; レヴィ, 1996: 106ff. さらに，原理主義概念を狭義の宗教的次元から切り離して，歴史的社会的分析の道具にしようという，本稿と同様の試みとして，Reinhard, 1995がある。政治秩序の維持に対する両義性は，伝統的な民衆観念においても見られる。制度化された放逸は，カーニヴァルに見られるように，共同体の安定化装置である反面，しかし場合によっては秩序への攻撃を促す端緒ともなった［バーク, 1988: 第7章］。反ユダヤ偏見という土俗的観念を引きずっている反セム主義の場合にも，当然想定されうることなのである。

14 Vokov, 1978; Rürup, 1976; Mommsen, 1989. なお，本稿の唯名化論は，ヴォルコフの文化コード論と一見類似しているが，以下の点で大きな相違がある。ヴォルコフは，左右に鋭く分極化した帝政期の政治文化状況のなかで，「右」の信条を総体的に表象する記号として反ユダヤ主義を捉えており，その点，「ユダヤ」そのものを記号と見なす本稿とはズレがある。決定的な相違は，ヴォルコフは反ユダヤ主義の性格を右翼的・保守的と定めるのに対して，本稿は以下に述べるように，左右を越えた原理主義的な両義性を想定している。

15 Niewyk, 1990.

16 Katz, 1989: 251.

17 カッツの一面的な思想史的方法は，彼のユダヤ人とフリーメーソンに関する研究［カッツ, 1995］でも顕著である。

18 Goldhagen, 1996: 48.

19 その証拠に，彼は近代ドイツ社会が合理的な西欧近代とは根本から異質な非合理的社会だったと唱えているし［Goldhagen, 1996: 28］，また「排除的反ユダヤ主義」がなぜよりによってドイツに発生したのかという点について，彼は，自分は比較史的研究は意図していないので他国のことは分からないからと述べて，説明を回避している［Goldhagen, 1996: 77］。

20 Berding, 1996.

21 Volkov, 1990: 59ff.

22 Goldhagen, 1996: 66.

23 Jochmann, 1976; Winkler, 1981.

24 帝政期の反セム主義政党の展開に関して邦語文献では，大場崇代の研究［大場, 1998］がある。

25 Zmarzlik, 1981. 「ユダヤ人統計」とは，ユダヤ人が兵役あるいは前線での従軍から不当に逃れて

いるとの風説を契機に，陸軍省が1916年10月に実施した調査である。しかし，調査の方法がきわめて杜撰だったことに加えて，調査結果が結局公表されずじまいだったために，かえって流言に油を注ぐ結果となった。これを機に，反ユダヤ勢力による誹謗が活発になり，またユダヤ人の間でも憤激が募った［Jochmann, 1988b: 110f.］。

26 Winkler, 1981: 271.

27 Fritzsche, 1998.

28 Levy, 1975; Volkov, 1996.

29 栗原, 1997.

30 マラス, 1996: 第2章。

31 Adam, 1979[2]: 46.

32 もちろん，筆者のこの主張は，いわゆる機能派的なホロコースト理解［たとえばMommsen, 1983; 石田, 1996: 280f.など］を前提としている。

33 ポイカート, 1991: 第11章; フライ, 1994: 223f.

34 ゴールドヘーゲンの著作をめぐる論争に関連して，ホロコースト研究の今後の方向として，こうしたハビトゥス化した反ユダヤ主義に注目しようという提言がある［仲正, 1998］。ただ，こうした研究方向には筆者は，本稿において反ユダヤ主義の「社会的拡散」の箇所で述べたのと同じ意味で疑念を感じる。本稿冒頭でもふれたように，筆者は偏見の社会史的研究が重要なテーマであり，貴重な知見をもたらすことを否定するものではない。しかし，あくまでも問題を，なぜホロコーストが可能になったのかという，いわば本来の「ホロコースト問題」に絞るなら，こうしたアプローチは，一見問題の根源に迫るように見えながら，実際には問題を無限定に拡散させることになろう。なぜなら，ゴールドヘーゲン流の硬直したドイツ史理解を採らないかぎりは，人びとの反ユダヤ偏見はせいぜいホロコーストの背景か土壌を用意したにとどまったからである。大量殺戮という意図的行為を説明するためには，戦争政策や行政機構の問題など，何らかの直接的な原因を説明に組み込まざるをえないのである。

35 現代におけるグローバル化に伴う社会変動とそれへの政治的反動については，筆者はスケッチを試みたことがある［竹中, 1998］。

文献一覧

本稿に関連する文献については，拙著［竹中, 1996］巻末の文献一覧も参照されたい。そこに挙げられている文献は，引用などで直接に参照した場合を除いて，ここでは原則として省略する。

石田勇治, 1996,「ドイツ第三帝国とホロコースト」歴史学研究会編『講座世界史8　戦争と民衆　第二次世界大戦』東京大学出版会

植村邦彦, 1993,『同化と解放 ― 十九世紀「ユダヤ人問題」論争 ― 』平凡社

大場崇代, 1998,「ドイツ第二帝政期における反ユダヤ主義政党の消長 ― ドイツ社会改革党（Deutschsoziale Reformpartei）を中心に」（1）～『北海学園大学法学研究』33-2～

J．カッツ（大谷裕文訳），1995，『ユダヤ人とフリーメーソン ― 西欧文明の真相を探る ―』三交社

栗原優，1997，『ナチズムとユダヤ人絶滅政策 ― ホロコーストの起源と実態 ―』ミネルヴァ書房

小坂井敏晶，1996，『異文化受容のパラドックス』朝日新聞社

佐藤健生，1997，「ナチズムの『歴史化』をめぐって ― 『歴史家論争』その後 ―」滝田毅編『転換期のヨーロッパと日本』南窓社

J．P．サルトル（安堂信也訳），1956，『ユダヤ人』岩波書店

F．スターン，1997，「ゴールドハーゲン論争」『中央公論』1997年2月号

竹中亨，1996，『近代ドイツにおける復古と改革 ― 第二帝政期の農民運動と反近代主義 ―』晃洋書房

―，1998，「『国民』への憧憬としての政治 ― 現代ドイツの極右人民主義 ―」野田宣雄編『よみがえる帝国 ― ドイツ史とポスト国民国家 ―』ミネルヴァ書房

徳永恂，1997，『ヴェニスのゲットーにて ― 反ユダヤ主義思想史への旅 ―』みすず書房

仲正昌樹，1998，「ゴールドハーゲン論争とナチズム研究の行方」『歴史評論』1998年5月号

P．バーク（中村賢二郎／谷泰訳），1988，『ヨーロッパの民衆文化』人文書院

N．フライ（芝健介訳），1994，『総統国家 ― ナチスの支配 1933～1945年 ―』岩波書店

D．ポイカート（木村靖二／山本秀行訳），1991，『ナチス・ドイツ ― ある近代の社会史 ―』三元社

M．マラス（長田浩彰訳），1996，『ホロコースト ― 歴史的考察 ―』時事通信社

G．E．モッセ（三宅昭良訳），1996，『ユダヤ人の＜ドイツ＞ ― 宗教と民族をこえて ―』講談社

山本秀行，1995，『ナチズムの記憶 ― 日常生活からみた第三帝国 ―』山川出版社

B．H．レヴィ（立花英裕訳），1996，『危険な純粋さ』紀伊國屋書店

Adam, Uwe D., 1979[2], Judenpolitik im Dritten Reich, Königstein/Ts.

Berding, Helmut, 1988, Moderner Antisemitismus in Deutschland. Frankfurt a.M.

—, 1996, Antisemitismus in der modernen Gesellschaft. Kontinuität und Diskontinuität, in: Manfred Hettling/Paul Nolte (Hg.), Nation und Gesellschaft in Deutschland, München

Bieberstein, Johannes R. v., 1992, Die These von der Verschwörung 1776-1945. Philosophen, Freimaurer, Juden, Liberale und Sozialisten als Verschwörer gegen die Sozialordnung, Flensburg

Browning, Christopher R., Dämonisierung erklärt nichts, in: DIE ZEIT, 19. April 1996

Fritzsche, Peter, 1998, Germans into Nazis, Cambridge/London

Goldhagen, Daniel J., 1996, Hitler's Willing Executioners: Ordinary Germans and the Holocaust, New York

Jochmann, Werner, 1976, Struktur und Funktion des deutschen Antisemitismus, in: Werner E. Mosse (Hg.), Juden im Wilhelminischen Deutschland 1890-1914, Tübingen

—, 1988a, Akademische Führungsschichten und Judenfeindschaft in Deutschland 1866-1918, in: ders., Gesellschaftskrise und Judenfeindschaft in Deutschland 1870-1945, Hamburg

—, 1988b, Die Ausbreitung des Antisemitismus in Deutschland 1914-1923, in: ders.,

Gesellschaftskrise und Judenfeindschaft in Deutschland 1870-1945, Hamburg

Katz, Jacob, 1989, Vom Vorurteil bis zur Vernichtung. Der Antisemitismus 1700-1933, München

Levy, Richard S., 1975, The Downfall of the Anti-Semitic Political Parties in Imperial Germany, New Haven

Mommsen, Hans, 1983, Die Realisierung des Utopischen. Die "Endlösung der Judenfrage" im "Dritten Reich", in: Geschichte und Gesellschaft 9

—, 1989, Die Funktion des Antisemitismus im "Dritten Reich". Das Beispiel des Novemberpogroms, in: Günter Brakelmann/Martin Rosowski (Hg.), Antisemitismus. Von religiöser Judenfeindschaft zur Rassenideologie, Göttingen

Niewyk, Donald L., 1990, Solving the 'Jewish Problem'. Continuity and Change in German Antisemitism 1871-1945, in: Leo Baeck Institute, Year Book 35

Reinhard, Wolfgang, 1995, Einleitung. Fundamentalistische Revolution und kollektive Identität, in: ders. (Hg.), Die Fundamentalistische Revolution. Partikularistische Bewegungen der Gegenwart und ihr Umgang mit der Geschichte, Freiburg

Rürup, Reinhard, 1976, Emanzipation und Krise, in: Werner E. Mosse (Hg.), Juden im Wilhelminischen Deutschland 1890-1914, Tübingen

Volkov, Shulamit, 1978, Antisemitism as a Cultural Code. Reflections on the History and Historiography of Antisemitism in Imperial Germany, in: Leo Baeck Institute, Year Book 23

—, 1990, Das geschriebene und das gesprochene Wort. Über Kontinuität und Diskontinuität im deutschen Antisemitismus, in: dies., Jüdisches Leben und Antisemitismus im 19. und 20. Jahrhundert, München

—, 1994, Die Juden in Deutschland 1780-1918, München

—, 1996, Nationalismus, Antisemitismus und die deutsche Geschichtsschreibung, in: Manfred Hettling/Paul Nolte (Hg.), Nation und Gesellschaft in Deutschland, München

Winkler, Heinrich A., 1981, Die deutsche Gesellschaft der Weimarer Republik und der Antisemtismus, in: Bernd Martin/Ernst Schulin (Hg.), Die Juden als Minderheit in der Geschichte, München

Zimmermann, Moshe, 1997, Die deutschen Juden 1914-1945, München

Zmarzlik, Hans-Günter, 1981, Antisemitismus im Deutschen Kaiserreich 1871-1918, in: Bernd Martin/Ernst Schulin (Hg.), Die Juden als Minderheit in der Geschichte, München